

がんであることを医師を告げられ、残された時間が少ないことを知らされた場合、患者はどのように現状を受け止めたらよいのだろうか。前回に引き続き、金大附属病院がん高度先進治療センター長の矢野聖二さん(44)に「医師が望むこと」を聞く。

◇◇◇
 切除することで治るがんもある。一方で5年生存率が1、2割というがんもある。余命いくばくもないことが分かったとしても、「小さくてもいいから目標を持つことが大切ではないか」と話す。

小さな目標とは、例えば「息子の結婚式に出席する」

医師が望むこと

「初孫の顔を見る」といった家族の節目もあれば、「旅行に行く」「好きな作家の本を何冊読む」ということでもよい。がんに侵される病床にあっても、心が前に向くようなことを一つ一つ、積み重ねる気持ちを強く持ってほしいというのだ。

後ろ向き姿勢

年間約100人のがん患者を担当している矢野さんには、こんな出会いがあった。60代の女性で、診察で末期の肺がんであることが分かった。「治療を受ける気はない」。そう遠くない未来に待ちかまえている死に絶望したのか、がん治療に対して後ろ向きな姿勢を

金大附属病院の「がん相談支援室」。無料相談を受け付けている



がんと向き合う

なかなか崩そうとしなかった。

「チャンスはある」と臨床試験の新薬を用いた治療を勧め、最後には「先生の治療を受けてあげる。(新薬を)飲んであげてもいい」ということになった。

結果的に、女性の命は1年半延びた。がんの再発による他界だったが、その間、女性は娘の結婚式に立ち会い、生まれたばかりの孫の顔も見た。

臨終の前日、矢野さんの手を握り、感謝するように「先生、はばたいてね」とつぶやいたことが忘れられ

小さな目標 積み重ねて

ない。

「苦しくても、今を乗り切っていく」という覚悟が大事です。医学はこの瞬間も進んでいる。乗り切れば、チャンスが生まれてくるんです」と話す。海外から個人輸入した薬で、酸素マスクをはずした2週間後には自転車に乗れるほど回復した患者もいるという。

10年、15年前に家族が闘病した経験を持つがん患者の中には、「家族の苦しんでいる姿が頭に焼き付いている」として、自身の治療をしりごみする人もいる。だが、がん治療はその間に新薬の登場を含めてめざましい進化を遂げているのも事実だ、と矢野さんは強調する。

院内に相談室

がんについての疑問を解消するため、金大附属病院は院内に「がん相談支援室」を設け、電話076(265)2040、平日のみを設け、地域住民を対象に無料相談を行っている。矢野さんは「自身の症状を正しく理解するのに役立ててほしい」と話す。

治療めざましく進化

病気を、症状を、痛み苦しみを治し、健康な身体づくりを提供します。

東洋堂 漢方

金沢市入江1丁目134まめだ大通り ☎(076)291-6666 (代)

◇「がんと向き合う」は毎週木曜日に掲載します。